

アメリカ雑誌界の実情詳細に

雑誌の細分化、多様化はますます進み、今年上半年も、ビニューティフル・スポーツ、『素敵な女性』など女性向き雑誌、『特選街』、『Hot・Dog・PRESSES』といった異色の雑誌を含め、八十数点にのぼる創刊があり混戦状態の観がある。

日本を上まわる雑誌『国家』アメリカでも、近代雑誌が生まれた一九〇〇年から今日まで、その変革はめまぐるしいようだ。



一九五一年小学館入社から五年目に、アメリカで評価の高い『コリヤーズ』廃刊の事実を知り、以来、アメリカ雑誌の研究にかけては第一人者といわれる金平聖之助氏（日本出版学会常任理事）が、こんど刊行した『アメリカの雑誌企業』（出版同人発行・出版開発社発売・三四〇〇円）は、日本では知ることに少ない実情を詳細に述べている。

次に、同氏がふれた第二部「一九五六年—現在」では、最近のアメリカ雑誌界に起つてくる問題点、ひいては日本の雑誌界にも大きな関心事が語られている。主なところを拾ってみよう。

雑誌企業に「革命」の引き金役を果たしたのはテレビの登場である。いうまでもなく、雑誌企業の死命を制するのは、広告収入だ。とくに「ゼネラル・インタレスト」雑誌とも、マス・マガジンともよばれる大雑誌は、広告媒体としてテレビに敵し得ず、さらに追い打ちをかけたのが雑誌郵便料金の大幅な値上げだった。七〇年代に入って早々、「ルック」、「ライフ」の休刊を招いたのは、背後の経済事情が大きい。代わって脚光を浴びてきたのは、特定の趣味、年齢層、地域を対象とした「スペシャル・インタレスト」誌だが、広告に依存せず、販売収入に依存することによって成功をみたのが、新『サタデイ・イヴニング・ポスト』とか。

文公の六氏の講演集である。わが子の教育に困難を感じ、何となく諦めかかっている親は本書を読んでみるのも見出すであろう。希望を与え、鼓舞するような書物である。

『〇歳からの母親作戦』（井深大著・こま書房・六五〇円）は人間のもつ無限の可能性と、それが〇歳児からの教育によって驚異的に発揮されることを説いたもので、多くの専門家との対談に

得がたい激動の『昭和外交』

『政変昭和秘史』

（サンケイ出版・㊦各三二五）

矢次 一夫 著

すでに半世紀を過ぎた激動の昭和史は、私たちの同時代史として厳正に記録されねばならない。この壮大な作業をまえにして、多くの歴史家が尻込みしているとき、矢次一夫氏は二カ年余にわたる筆を雑誌『正論』誌上において執りはじめ、ついに上下二巻の堂々たる同時代史を完成された。

基づく豊富な事例と話題が著者によって見事に消化され展開されている。

以上の五本の書物は多くのことを教えてくれる。しかし家庭教育は実践である。子どもを成長を温かく見守りながら、親が自信をもつて働きかけていくことが大切であるが、子どもにも個人差があること忘れてはならない。（東京都 大学教授 詫摩 武俊）

著者は秘史であり、私史であるというが、本書こそ余人をもつて代え難い『望望の昭和外交』であると思う。

齢八十歳にしていまなお青年の気概を有し、政治、外交の全般に通ずるばかりか、その論旨の伶俐にして緻密しかも雄大なことは、著者を知る人の共通に認めるところであろうが、本書を繙いた読者は、矢次一夫氏こそ、動乱の昭和時代を生きぬき、政治を動かしてきた一代の俠客にして野人たるを知るであらう。

北一輝、大川周明、吉野作造、麻生久、永井柳太郎、風見章、有

ぼくらの気持

栗本 薫 著
ロックバンド「ザ・グレイトフル・バグ」解散一年後、仲間のヤスヒコは大手出版社の雑誌編集者になっていった。ところがヤスヒコが担当の人気少女マンガ家が惨殺され、現場にはヤスが犯人といわんばかりの遺留品。そこで、ぼくは親友ヤスのため、奮然起つて真相究明に乗り出す。若さと楽しさいっぱいの推理roman。

（講談社・七八〇円）
インテリジェンス ギャップ
宮川 隆義、W・E・コル

本書でいうインテリジェンスとは「情報」のこと。米国では必要な情報の九五割は合法的手段で得られ、公開情報も収集分析はすでに迅速、適切な対応がなされていますと指摘する。本書は日本の内外の情報のズレを国際活動の現場から打ち鳴らした警鐘。（政治広報センター・一四〇〇円）
全国市町村名変遷総覧

「市制・町村制」は明治二十二年に施行されたが、以来九十年、今日まで幾多の分離、合併が行われた。本書はその間にわたる全国市町村の設置分合を各都道府県別に集大成したもの。総覧は「明治二十二年の市町名」「90年にわたる変遷」など三項目に分かれており、各県でまちまちの市制、町村制の施行年月日が明記されているほか、郡の変遷も掲載され、移り変わった市町村の歩みを知るうえで貴重なものだ。
（日本加除出版・五七五〇円）

立ち読み

田八郎から近衛文麿、東条英機にいたるまで、枚挙にいとまのない氏の人脈、交友、その親疎の一鱗一爪は、矢次一夫氏がたんなる黒幕的策士とはまったく異次元の根っからのリベラリストであることを物語っている。

氏を一貫して流れる信条は、軍部とくに陸軍の横暴が国策をふみにじったことへの痛烈な批判精神に支えられている。「明治以来の歴代政府は、進歩的な社会政策などいかに識者が要求しても耳をかそとはしていない。そのくせ何か暴力事件が突発したりすると、あわてて一時のカンフル注射のような策をとっている」。「国策の大事を、対人関係における好悪だけで律するというのはベラ棒というほかはない」といった指摘は、訓戒の言としても千鈞の重みをもっている。

しかも近衛を評して「近衛というものは、…結果的には軍部の政治的ロケットであり、大軍拡、国防国家建設という、国民にとっては相当に苦しく、そして最後には大敗戦という悲劇的運命のレールの上に、いつの間にか、みんなをやんわりと乗せる役割を果たした」と語り、松岡洋右を評して「一見豪放に見えて、実は小心のところがあり、非常に鼻柱が強そうで、妥

協性にも富んでいた松岡の性格的矛盾は、激動する時代のつぼの中に入れられると、弱点の方が大きく作用したり、映し出されてくる」といわれる人物は、いまや著者をおいてはほかにあるまい。

私にとって本書の庄巻は第二巻「日華事変」であるが、蘆溝橋事件に際し、暴支陽謀派が戦端を切るきっかけとなった宋哲元軍の辱殺による撤兵協定違反についても「中国人のユーモアを解し、ムードを交えた処理方

横浜の今昔を流麗な筆で描く

『横浜物語』

卓逸書

(東京書籍・二二〇〇円)

実は私もこの秋に横浜をテーマにした港の画文集を出す予定になって一度書き上げた原稿をもう一度いじり直しているところなのだが、その折りにこの本を読む機会があって大へん興味深く、新しい知識を得た。と同時に日本で第二の人口を持

法を心得ていたらと、当時を回想して千悔の念に堪えないものがある」と述べているあたり、蒋介石の自信過剰がみずからを窮地に陥れたと見做す西安事件についての本書の分析とともに、矢次氏が「本物の支那通」であることをも証明している。本書を私は昭和史を知らない若い読者に推奨するとともに、世の政治家たちが本書に接して、襟を正されんことを願ってやまない。

(東京外国語大学教授中嶋嶺雄)

つ大都會を書くことのむずかしさを感じた。近頃どういふわけか、横浜のことを書いた本が割合よく出版されている。自分が書いているから目立つのかもしれないが、いずれも気になって読んでみた。その中にある『横浜物語』は一味違っていて一気に読ませるものがあつたように思う。従来のものはどちらかと言えば郷土史家によるもので史実には詳しいが、視野がせまい場合が多い。この種の本は更に筆力の魅力が加わらないとつまみの悪

いものになってしまふ。瓜生氏の場合は客観的にとらえて、さらに実際に歩いて感じとつた実感が加わり、作家としての筆力で表現した点に大きな魅力が生まれたのではないだろうか。

それでも、なお、横浜という歴史の浅い、たつた一〇〇年そこそこの日本第二の都會になつた町は扱いにくいものである。縦につらぬく人脈がなく、しかも生粋の地の人間がいない、そのくせ近代文化の発祥の地がやたらとあつて話が八方へ拡がる、文学的に一つの筋を通すのに著者は大へんな苦労があつたのではないかと思う。面白そう

で、しまらないのが横浜である。人間でありながら、どれも中途半端で主役になりきれない、浅野総一郎ぐらいが一応中央にまで知られているがそれでも三巻までに至らない。伊藤博文も結局、横浜は腰掛け程度、文学的に書こうとすればする程横浜の大きさと浅さが足を引っぱつたことだろうと推察する。変な町なのである。

中村房次郎の逸話はあまり知られていないだけに私には大へん興味があつた。井伊直弼批判は全く私も同感。総じて横浜の町に暖かい目を向けて書かれた嬉しい本である。(イラストレーター 柳原良平)

不幸は突然やってくる！ 脳卒中に打ち克つ心と体のノーハウ

脳卒中克服法

倒れた病院長のリハビリ・ノートから

●B6判・上製本・304頁・1,300円

サンケイ新聞の本

清恵会病院院長 佐野 恵

脳卒中で倒れた医師の立場から、如何にすれば病気を克服できるかを克明に綴った手記。当事者のみならず、健康に気をもむ中高年層の保健指導書としても、必ず役立つ本である。

発売 サンケイ出版
〒100 東京都千代田区大手町1-7-2
〒530 大阪市北区梅田2-4-9

発行 サンケイ新聞プロダクション
〒100 東京都千代田区大手町1-7-2